

# ワイン農家は世界遺産

2014年6月7日 朝日カルチャーセンター立川 岡部由紀子

## <Neusiedler See ノイジードラー湖・Fertő tó フェルテー湖 >



オーストリアとハンガリー両国にまたがる湖の自然と周辺地域の文化的景観が2001年にユネスコの世界遺産に登録された。

西のアルプス山塊、東のプスタ大草原に挟まれた湖は、南北約36kmにわたって細長く広がり、水深が最大で1.8m、海拔115m、雨量の変化によってアメーバーのように形を変え、19世紀までは完全に消滅することもあった。

この地域は、大陸性気候と海洋性気候をあわせもち、乾燥した暑い夏と温暖な秋、寒い冬が、多彩な動植物を育み、自然保護区でもある。

湖は海水の1/20の塩分を含み、白濁している湖底に太陽光が届きにくいいため、藻の発生や、ヨシの繁茂が押さえられている。カワカマス、ザンダー、コイ、ナマズなどの漁も行われている。



春：水位はあがり、渡り鳥がやってくる。シギ、カモ、ガン、サギ、コウノトリなど300種類あまり

夏：水位は下がり、湖を取り囲むヨシ（葦）の湿地は鳥たちの餌場となり、ヒナが巣立ちの時を迎える

秋：湖の影響で晩秋まで比較的暖かく、水位は上がり始める。渡り鳥が越冬地へ旅立つ

冬：湖は凍結し、雪嵐にみまわれたり、冬の終わりには流氷が東岸に乗り上げることもある



### ヨシの刈り取り

ロシアからの寒気が流れ込む冬は湖表面が厚く凍結し、氷上に突き出ているヨシの刈り取り作業が行われる。

漁ができない漁師も作業にあたる。束ねられたヨシが湖畔にテントのように並んでいる光景は独特。

ヨシは、ブルゲンラントの伝統家屋の屋根の材料となり、よしずに加工されてきた。

← Gottfried Kumpf 「ヨシを刈る男」1978年

## 葡萄栽培とワイン醸造

乾燥した気候と長い日照時間 … 糖度の高い良質なブドウや赤ワイン用の品種の生育に適する  
暖かく長い秋 … 遅摘みのブドウや貴腐ブドウから、甘味の強い高価なワインも作られている  
変化に富んだ土壌 … 豊富な種類のブドウが栽培され、ミネラル分に富んだ個性的なワインができる



↑ Gottfried Kumpf 「葡萄の収穫」1975年 手前右に並んでいるのがケラー

葡萄の収穫作業は、親戚、隣人、知人など多くの人の手を借りる。記念撮影をして、作業後にご馳走を振る舞うこともある。1960年頃までは、ブドウの入った大樽を載せた荷車を、牛馬がひく光景が見られた。使用人がいた時代が終わると、東欧からの季節労働者が作業にあたるようになる。

母屋に地下のワイン貯蔵室（ケラー）がない家は、畑の脇に地下室を持つ小さなケラーを建て、醸造と貯蔵をそこで行った。現在は、自家製のワインを観光客に提供する場として利用されているものもある。

冷房や冷蔵設備がない時代には、地下又は半地下の涼しいケラーで、木製の樽に入れたワインを熟成、貯蔵することがあたりまえだった。ケラーや樽ごとに生息する酵母などの微生物が異なり、同じ品種のブドウからできるワインの味も微妙に異なる。ワイン醸造は、技と勘を必要とする仕事であった。現在、温度管理ができる「地上のケラー」で、ステンレス製の容器でワインを醸造することが主流となりつつある。大量に品質に差のないワインを製造できるので、世界中に販路を拡げつつある。

オーストリア・ワイン・マーケティング協会のサイト: <http://www.austrianwine.jp/>

## 白い家が連なる原風景

ゴットフリート・クンプフ(1930-)は、1968年から、ブライテンブルン Breitenbrunn の元ワイン農家の建物に住み、湖周辺の光景を描いている。

彼の住居は、間口15m、奥行きは100mほどある典型的な伝統家屋。右の絵は彼の住まいがモデル。建物と敷地は奥深く伸び、一番奥には納屋がある。表通りに面した部分がかつても古く建てられた。細長い敷地に使用人の部屋や家畜小屋を建て増していったため、ウナギの寝床のようになった。奥に立っている塔は、教会ではなく防御用櫓



↑ Gottfried Kumpf 「ことわざと腕白小僧たち」1996年



← 居間と台所、家畜小屋の3部分からなる基本形

粘土を固めたブロック積み、壁は白いモルタル、屋根はヨシで葺く。  
この Streckhof（まっすぐに伸びた家屋）と呼ばれる建築様式は、ハンガリー北西部、モラヴィア、スロベニアでも見られる。

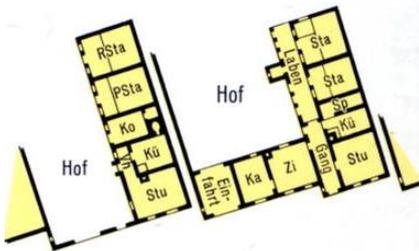


← ブルゲンラントの伝統家屋の模式図

カギ型とまっすぐに伸びた2軒の家が表通りに面して並んでいる。

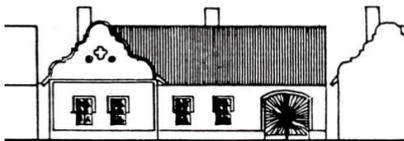
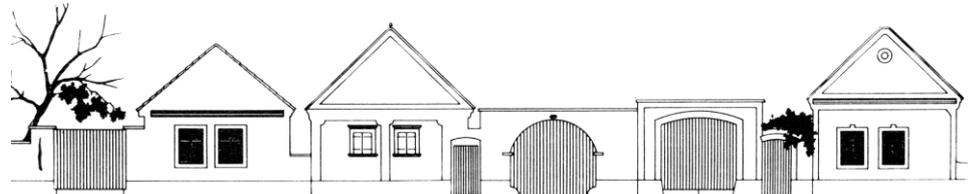
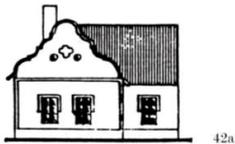
左側の家は、表から居間、台所、穀物倉庫、馬小屋

右側の家は、表から居間、台所、食料庫、家畜小屋、奥に納屋  
道に面している部分に、中庭への入り口と居室が2部屋ある



中庭の空き地に建て増しされていく部屋は、竈を備えた住まいで、  
使用人が家族で暮らすことができた。

家屋は、表通りから見ると下図のようなこぢんまりとした佇まい  
三角形の切り妻が、通りにリズムカルなアクセントを与える



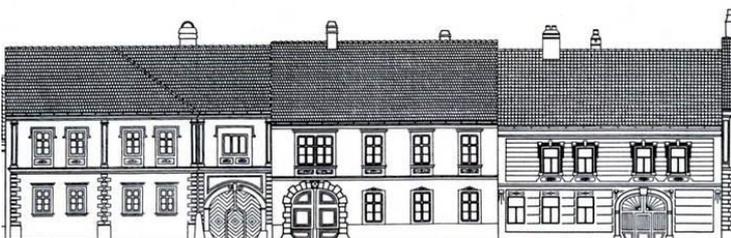
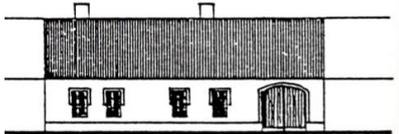
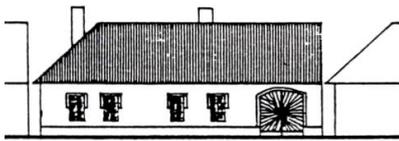
← ファサード（建物の正面）の変遷

19世紀から20世紀にかけて 改築を重ねた家

バロック風の破風が美しい伝統家屋、右には中庭に通じる門があった  
と思われる。

門を壊してカギ型の家に改築し、中庭に通じる入り口には細かい木片  
を組合せて細工を施した扉をつけた。

単純な造りの扉に替え、屋根も改装し、単調な外観となる

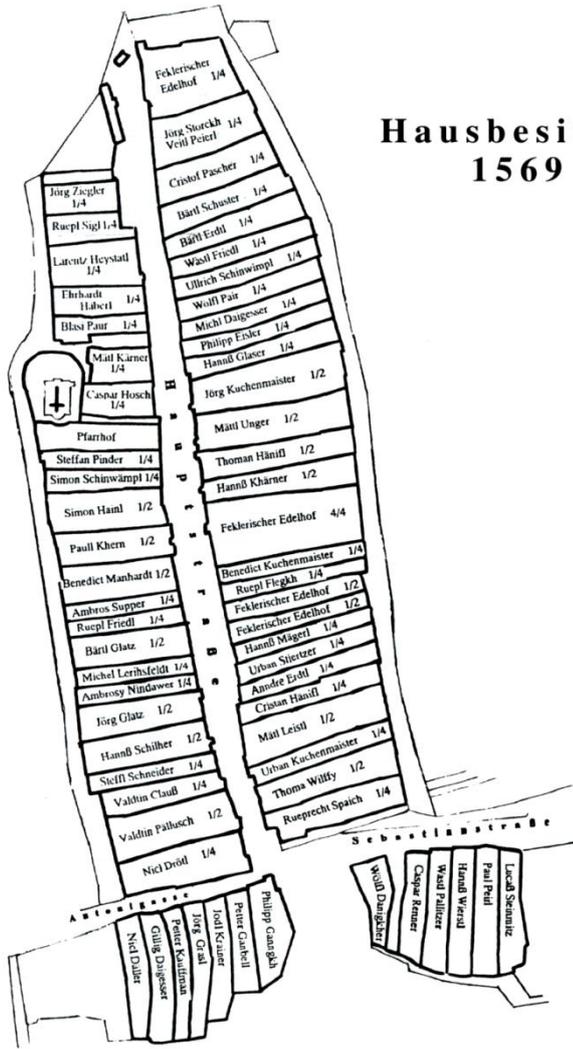


← ルスト Rust の農家のファサード

オッカウの隣にあるルストは、1649年に都市の  
自治権を買い取った。

基本的には Streckhof だが、正面には豪華な装  
飾がほどこされている。

オッカウ 1569年の地図

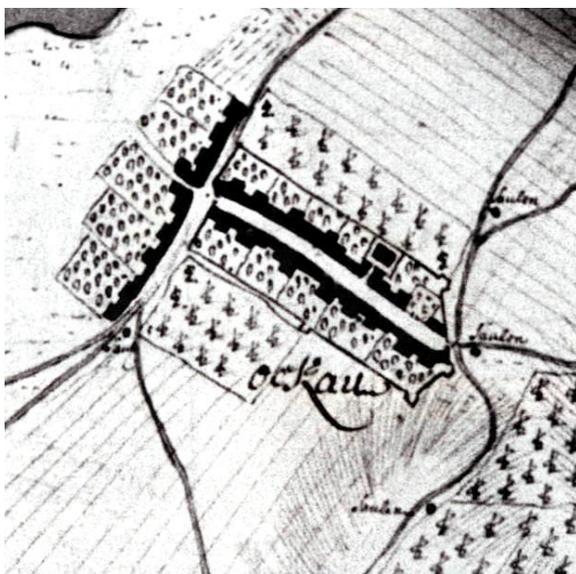


**Hausbesitzer  
1569**

オッカウ 現在の公図



11世紀から13世紀にやってきたドイツ系入植者が、中央通り Hauptstraße の両側に並ぶ家並みの基礎を築いた。1569年の村の地図は、現在の地割りとほぼ同じであるが、地図に載っている敷地の所有者の苗字は、現在の住民の名前の中にひとつも残っていない。度重なる外敵の来襲もあり、住民が入れ替わったと思われる。



Oggau mit Befestigungsmauer, Waltherische Karte 1754/55

1590年、62軒の農家が土地を占有していたが、領主の許可を得ずに農地に家を建てられなかったため、中央通りを挟んだ敷地に（1569年の地図に載っている部分）人々は密集して住んでいた。

← 1774/75年の地図

防御壁が、オッカウの中央通りを挟んだ家並みの周囲にできていることがわかる。1675年にはできていたという記録から、1650年頃に作られたと推定されている。中央通りに平行して走る二本の裏通りに面して作られた防御壁は、納屋を連ねたものであった。

## ワイン醸造農家の家屋の変遷（オッカウ Oggau）

Hauptstraße 96 現在の当主(1930 -) … Eugen Wimmer (オイゲン・ヴィマー)

当主の妻 (1933 -) … Maria Wimmer (マリア・ヴィマー)

1569 年 地図に記載されているこの敷地の占有者 Ulrich Schwämpl

1867 年 一階の増築部分に、現在の当主オイゲンの曾祖父のイニシャルと年号 JF 1867

Johann Freund (1808-1878)… オッカウの豊かな農家で飲食店も経営していた。娘がオイゲンの祖父 Josef Wimmer (1865-1954)と結婚

Josef Wimmer … 近くの村の粉ひきの家に生まれたが、両親が3才で亡くなり、別の粉ひきに育てられた。結婚によってオッカウに家を構え、ワイン醸造に従事 Hauptstrasse 31

1930 年 オイゲンの祖父 Josef Wimmer がこの家を取得し、オイゲンの両親を住ませた。

Eugen Wimmer (1903-1958)と Maria Wimmer (1904-1973) 現在の当主夫妻と同名！

オイゲンの母方の祖母 Rosalia Schaub(1882-1955)と、母の兄 Karl Schaub(1902-1944)も同居、他に使用人が4家族、下働きの女性も住んでいた。

パン焼き窯一つ、 竈は4個（うち2つは2家族で共同使用）

WCは屋外、風呂場はない（バスタブを台所に置く）水は井戸から

馬、牛、鶏、豚を飼っていた。小作人も鳥、豚を所有

1940 年 2階の奥に住んでいた小作人の家族が1階に移り、2階部分を身内で使用

2階にWCを作り、水道を引き温水をためる装置も作る。パン焼き竈は1943年まで使用村で初めてトラクターを導入。荷車をひく馬の飼育をやめる。

1950 年 小作人の家族が転居

1963 年 オイゲンとマリアが結婚

1964 年 通りに面したファサードに出窓をつける。風呂場と洗濯場を作り、台所を改造

### 1階部分の変遷

通りに面した母屋と、半地下のケラー（ワインの醸造作業と熟成、貯蔵を行う場所）は、家が建てられた当初からあるもっとも古い部分。地下に本格的なケラーを持つ家は多くない。

母屋から奥へと伸びる使用人の家族が暮らしていた部屋や家畜小屋は、増築部分で19世紀にはあった。

敷地の一番奥の納屋は、1650年頃、トルコなどの来襲に備えて村の防護壁の一部として建てられた。

### 2階部分の変遷

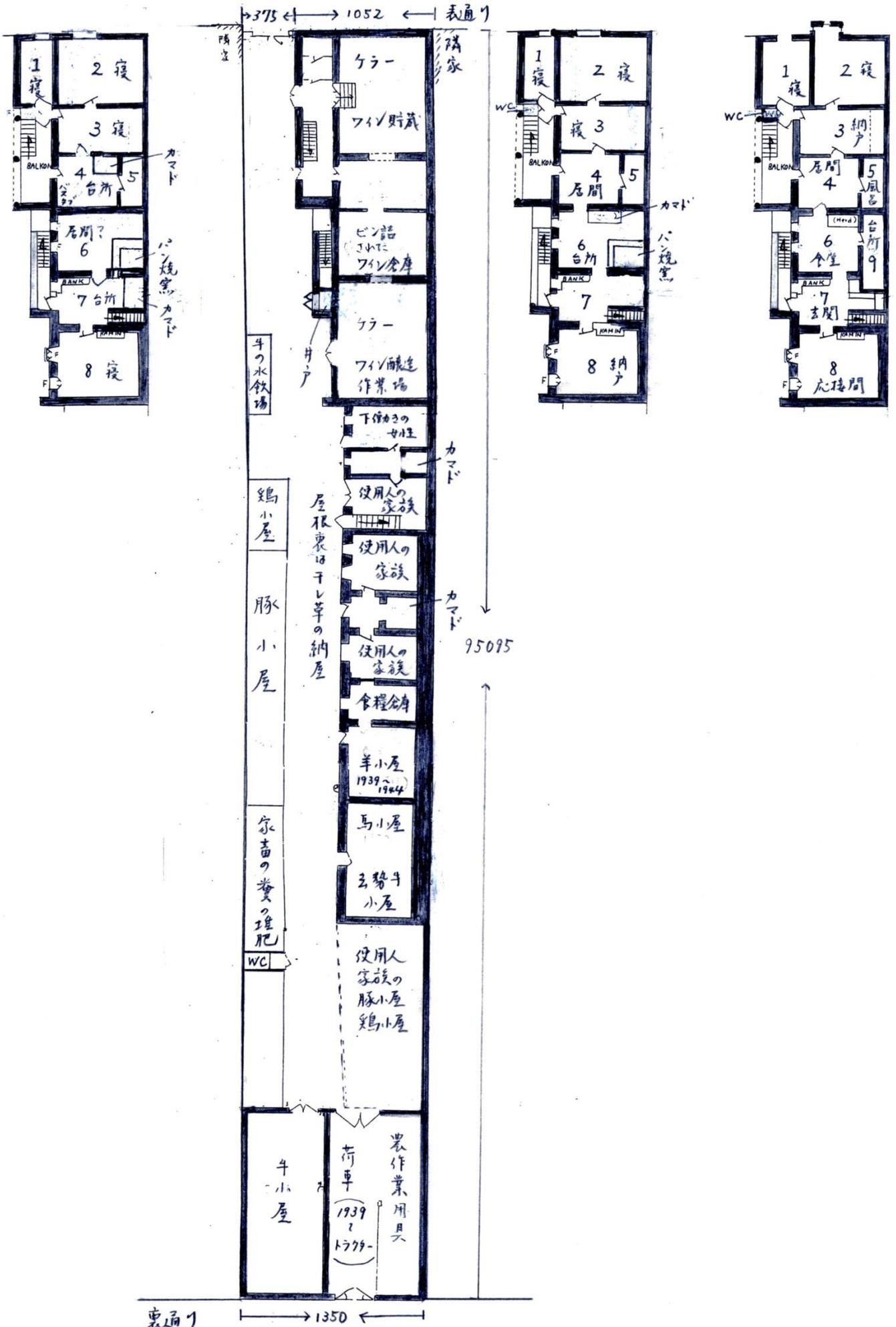
|        | 1930 年    | 1940 年        | 1970 年       |
|--------|-----------|---------------|--------------|
| 部屋番号 1 | 寝室（叔父）    | 寝室（叔父）        | 寝室（母）        |
| 2      | 寝室（父母）    | 寝室（父母・オイゲン・妹） | 寝室（オイゲンとマリア） |
| 3      | 寝室（祖母）    | 寝室（祖母）        | クローゼット       |
| 4      | 台所        | 食堂兼居間         | 狩猟の間         |
| 5      | 食糧倉庫      | 食品庫・温水タンク     | 風呂場・洗濯場      |
| 6      | 居間        | 台所            | 食堂兼居間        |
| 7      | 台所        | 使用人家族の食堂      | 玄関の間         |
| 8      | 寝室（使用人家族） | 納戸            | 応接間          |
| 9      | パン焼き竈     | パン焼き竈         | 台所           |

1930年2階

1940年1階

1940年2階

1947年2階



## ブルゲンラントの歴史

### ローマ帝国の時代／諸民族の往来／フランク王国の進出

- 1 世紀頃 帝国の属州「パannonia」の一部。ワイン醸造 \*①も始まっていた。  
アドリア海とバルト海を結ぶ通商路「琥珀の道」は帝国以前から存在していたが、湖西を通る道が軍用道路としても整備された。
- 5～8 世紀 フン族・東ゴート族(5 世紀)、ランゴバルト族(6 世紀)、アヴァール族(中央アジア遊牧民)とスラブ系諸族(6～8 世紀)がやってきた。
- 8 世紀末 カール大帝によるアヴァール征討 フランク勢力がこの地域に進出

### マジャール(ハンガリー)人の登場／ハンガリー王国の成立

- 10 世紀初め ウラル山脈の方から移動してきたマジャール人は現ハンガリーの中央あたりに定着  
さらに、ドナウ川を越えてドイツ、イタリア方面をうかがう。
- 955 年 アウグスブルク近郊の戦いで、ドイツ王の軍によりマジャール軍は壊滅的打撃。以後、半農半牧の生活に戻る。
- 1000 年 マジャールの大首長は洗礼を受けイシュトヴァーンと称し、戴冠。キリスト教の受容は、布教を掲げて東進するドイツ勢力の矛先をかわす唯一の道

### 中世の「ブルゲンラント」

- 11 世紀 現オーストリア方面はドイツ国王が「辺境伯領」としてバーベンベルク家に支配を委ねていた。  
ハンガリーとの間は、現ブルゲンラントの西側が国境としてほぼ定まる。
- 12 世紀 ハンガリー国王は、西部国境の守備を固めるための移民を招請。マジャール人の他、ドイツ系の騎士も領地をもらい、出身地などから移民を募った。
- 1241～2 年 モンゴル軍の襲来 → この地方の村々も壊滅 \*②
- 13～14 世紀 シトー派修道会の進出 → 優れたワイン生産技術を紹介

\*① ローマ以前、ケルトの時代の墓地(アイゼンシュタット)から栽培葡萄の種が発見される。

4 世紀の墓地より、赤ワインが付着した杯(オッカウ)

\*② 「ノイシードラー湖」とは「新しい定住者」という意味のドイツ語

モンゴルの来襲で消滅した湖北の市場町に、ドイツからの移民が定住。町および湖の名となった。

### オスマントルコとハプスブルクの間で

- 15 世紀 オスマントルコがバルカン半島を北上し \*③、ハンガリーまで圧迫
- 1526 年 対トルコの「モハーチの戦い」→ 国王ラヨシュ二世陣没  
ハプスブルク家との婚姻政策上の約束で王位継承権は同家に移る。(実質的な支配は西ハンガリーなど一部に限られる)
- 1529 年 オスマントルコの来襲(第一次ウィーン包囲) \*④
- 1683 年 第二次ウィーン包囲 反撃に出たハプスブルク側は、オスマンからハンガリー領の大半を取り返す。↓
- 1699 年 カルロヴィッツ条約

\*③ 15～16世紀、6万人のクロアチア人がブルゲンラント地方、さらに北のチェコ、スロバキア方面にまで移住。クロアチア人の村落はブルゲンラント全体に点在し、独特の習俗を守っている。

\*④ 度重なる戦禍

集落の自衛戦略

オスマントルコ以外の来襲

1604-06年

ハンガリー東部の貴族が、ハプスブルクに対決し、牛追いや貧農を起源とする戦闘集団を組織。ブルゲンラント地方も席卷、トランシルバニア侯に選ばれる

1620-23年

後継のトランシルバニア侯もハンガリー西部に来襲

《ブアバツハ》領主の許可のもと、1630-34年に防御壁を建設。オスマンの第二次ウィーン包囲では役に立たず、住民はライタ山地に逃げ込む。

《オッカウ》「村」としては例外的に防護壁を作った。(1675年以前)

オーストリア・ハンガリー帝国／第一次世界大戦とハプスブルク帝国の崩壊

- 1867年 ハプスブルク君主を共通に戴く「オーストリア・ハンガリー帝国」の成立  
ハンガリーでは非マジャール人に対し「マジャール化」の推進、西ハンガリーのドイツ系住民も歴史上はじめて居心地の悪さを感じた。スラブ系諸民族の不満も高まる。
- 1914年 ボスニアでオーストリア皇太子暗殺 → 第一次世界大戦
- 1918年11月 第一次世界大戦の終結 オーストリア＝ハンガリー、休戦協定に調印。続いてドイツも。旧帝国下の諸民族が「民族自決」の流れで独立への道を歩み始めたのに対し「ドイツ系オーストリア共和国」の宣言 \*⑤
- 1919年9月 サン・ジェルマン講和条約調印(対オーストリア…国名から「ドイツ系」削除される)
- 1920年6月 トリアノン講和条約調印(対ハンガリー) \*⑥
- 1921年12月 条約で約束された土地がオーストリア領になる。  
新たな州の名前は「Burgenland」\*⑦

- \*⑤ 西ハンガリーのドイツ系住民は「西ハンガリードイツ民族会議」を設立し、オーストリアへの統合を求める主張をした。
- \*⑥ ヴェルサイユ体制の一環をなす二つの条約で、現在のブルゲンラントはオーストリア領と定められた。(誰もが州都としてふさわしいと認めていた Ödenburg も含む)
- \*⑦ ハンガリー政府は1921年10月、ショプロン (Ödenburg) 地区での住民投票を条件に、西ハンガリーの引き渡しを約束した。12月に実施された住民投票は、オーストリア側の選挙担当者があきれかたげられて引き上げてしまうほど「茶番」だった。→ 住民投票の結果、この地区はハンガリーに帰属となる

ナチの時代と第二次世界大戦／現代

- 1938年 ドイツ軍が侵攻する中で独逸合邦完成。オーストリアは7つの管区に編成。ブルゲンラントは分割
- 1945年 大戦末期にソビエト軍がブルゲンラント地方に進軍。戦死者の中にはヒトラーユーゲントの少年もいた。
- 1989年 「汎ヨーロッパピクニック」の舞台となる → ベルリンの壁崩壊の序章